

# 重度知的障害児と見なされた子の本当の力を発揮するための指導

埼玉県立熊谷特別支援学校 教諭 関口あさか

キーワード：重度身体障害、コミュニケーション、表出手段の獲得、実態把握

## 実践の概要

重度知的障害があると公的機関から診断を受けた、重度身体障害のあるAさん（当時小学1年生）の本当の思いや考え、思考をより多くの人に分かる形で表現するための支援及び指導。

### 1. Aさんの実態

小学部1年生 男子

障害名：ビルリビン脳症による脳性麻痺（アテトーゼ型）

#### 【身体面】

写真1のように非常に筋緊張が強く常に全身に力が入ってしまい、目線と口角以外を自分でコントロールすることができない。



写真1

#### 【認知発達面／コミュニケーション面】

また、発語もなくコミュニケーションを取ることも困難である。就学前の医療機関からの診断では、重度知的障害があり知的発達の評価は最重度の評価となっていた。担任として関わる中で、こちらの問いかけに関してYesの時は左口角を上へ上げ、Noの時は右上に視線を向けることで確実に表せるようになった。さらに多くのことを理解しているのではないかと、医療機関から出されている評価は本当に合っているのか疑問に思うようになり、太田ステージやNCプログラム、学習到達度チェックリストをYes、Noで取り組めるように工夫し、実態把握を行った。すると、文字概念数概念ともに6歳程度であり、年齢相応の認知発達があることがわかった。表出面に大きな課題があることで、今まで認知面に重度の障害があると誤解され、コミュニケーションが難しくなっていることがわかった。また、自分にはできないとすぐに諦めてしまい、とても消極的な様子であった。

### 2. 目的・目標及び実践内容

#### (1) 具体的な活動を通じた言語概念や言語表現、数概念の獲得

自分で身体を動かして外界の物に触れる経験がほとんどなかったため、様々なものに触れ、体験し、それを言葉と一致



写真2

させる経験を多く重ねた。芋虫やカブトムシを育てて観察したり、実際にブランコに乗って速さを言葉や数字で表す活動をした。写真2は実際にAさんがアプリ「声シャッター」を活用して撮影した芋虫の写真である。

このように経験している様子をiPadで写真や動画を撮影し、撮影した写真を見ながら何をしたら文字で表す経験を重ねることで、記憶を補助するだけでなく、文字と経験を確実に一致させることをねらいとした。実際に経験している様子をiPadで写真や動画を撮影し、その後、それを見ながら写真3のように、絵カードコミュニケーションアプリやトーキングエイドアプリを使って文字でその様子を表す活動を重ねた。具体的には、「誰が・何を・どうして・どうだったのか・どのような様子であったのか」などの3語から4語のイラストや文字で表した。ひらがなを50文字獲得し、Aさんの語彙力がシンボルで賄うことが難しくなったため、2学期よりトーキングエイドに移行した。



写真3

#### (2) 自分でできたという経験を重ね、もっとやりたい、じぶんでやりたいという気持ちを育てる

Aさんが自分でコントロールできる視線と口角だけを活用して、iPadやPCを操作し、ゲームで遊んだり、楽器を演奏したりして「自分でできた」経験を重ねられるようにした。具体的には、ピエゾスイッチとなんでもワイヤレス、iPadタッチャーを活用して、口角の動きだけで、写真4のように「マリオラン」などのゲームをする経験を重ねた。生まれて初めて自分で操作してゲームをすることができ、非常に楽しんでやり、ゴールすると声を出して周りの教員や友達に伝えるようになった。



写真4

また、iPadのピアノアプリがやりたいと積極的に伝えるようになり、写真5のようにピアノを演奏して得意げな表情を多く見せるようになった。さらに実際のピアノにも手を伸ばし鍵盤を押そうとする様子も見られるようになった。



写真5

また、SurfaceとTobiiを活用して、視線入力で絵を描いたり、ゲームをしたりし、自分でコントロールしている経験や、自分で達成する経験を重ねた。

上記のような経験を重ねることで笑顔と共に「ドヤ顔」が見られるようになり、他の授業や初めてのことで積極的に「やりたい」という意思を出すようになった。

### (3) 誰にでも伝わる表出手段を獲得する

経験したことを、1学期には絵カードコミュニケーションアプリで右の写真のように文章を作って帰りの会で発表したり、家庭で「今日は誰と給食を食べたのか」「今日は誰がお休みだったのか」などをお母さんに伝えられるようになった。



写真6

1学期の半ばに文字で伝える意味について教えるために、初めて自分で文字を使いお母さんに思いを伝える経験をした。その際に「すき」という文字を選択し、お母さんにその意味が伝わると大きな声を出して喜び、非常に得意げな様子であった。その日以降文字で伝えたい気持ちが高まり、1学期でひらがな50音をすべて覚え、2学期以降から2文字から3文字の単語をトーキングエイドで構成できるようになった。2学期からは、伝えていたことをトーキングエイドで文を作って下の写真3のように表現できるようになってきた。



写真7

### (4) 物語や文の内容を理解する

年齢相応の言語発達を獲得していることがわかったため、1学期の初めから国語の教科書を使って学習を進めた。初めは文字を読むことが難しかったが、2から4語で構成されている単語が読めるようになり、2学期末には、3から4語で構成させている文は黙読して意味を理解できるようになった。しかし、読み速度は非常に遅く、代読すると内容をよく理解することができたため、1学期後半からアクセスリーディングを申請し、電子教科書の利用を始めた。自分の聞きやすい速度で内容を聞くことができ、テストなどでも良く理解していることが点数にあらわれるようになった。



### 3. 今後に向けて

身体の障害が重度であると、一見すると知的発達の遅れも重度と捉えられてしまう子どもたちがいる。Aさんは医療機関においても、重度知的障害があると判断されていた。身体の障害により、手足をコントロールできない、発語や発声が困難な子どもの多くは表出手段がないために表現する機会や学ぶ機会、コミュニケーションをする機会が奪われてしまっているケースもある。そのような子

どもに、スイッチやアクセシビリティ機能などのテクノロジーを活用していくことで、その子の持つ力を伸ばすことができ、また自分の力でより多くの人とコミュニケーションできることを、Aさんの事例によって明らかにすることができた。そのようなAさんの様子を学校内の先生やAさんの作業療法士、理学療法士と共有し、同様のケースの子どもたちへの実践へと広がっている。

また本校では、「創造をカタチに！プロジェクト」という、Aさんのように身体障害のある子どもたちの表現力を、テクノロジーを活用することで広げる体験会や研修会を様々な企業と共に年に1度のペースで6年間続けている。写真はファーストリテイリングと共同企画した、アプリ「UTme!」を活用したTシャツ制作体験の様子である。iPadの画面に手や指で描いた絵が、そのまま目の前で大型プリンタからTシャツに印刷され、その場で着た。その後プリクラを撮ったりみんなに見せたりした。



写真8

他にも、写真9のように3Dプリンタを用いた政策会や音楽フェス、アートフェスなど、テクノロジーを活用した表現会を行っており、県内外から親子や教員の参加しテクノロジーを活用した表現の可能性を広げる活動が広まってきている。



写真9

これからさらにテクノロジーが発展していき、障害が重い子どもたちの支援の幅が広がり、Aさんのような障害を持つ子どもたちの表現や学習の保障の可能性が広がっていくのだと感じている。そのような社会になることを見越して、Aさんの夢の実現に向かって取り組んでいきたいと考えている。

### 4. 参考文献

1. 中邑 賢龍『AAC入門』こころリソースブック
2. 徳永 豊 『障害の重い子どもの目標設定ガイド 授業における「学習到達度チェックリスト」の活用』慶應義塾大学出版会
3. 津田 望、東 敦子『認知・言語促進プログラムスターキット (NCプログラム)』
4. 大田 昌孝、永井 洋子『太田ステージ認知発達治療の実践マニュアル』日本文化科学社
5. ドロップレット・プロジェクト『視覚支援シンボルで楽々コミュニケーション』エンパワメント研究所